

早稲田大学という場所は、こうした学びに最も最適な場所である。なぜなら早稲田

大学は「自由と多様性」において特徴づけられる大学であるからだ。大学は何も学生に干渉しない。私が経済学のゼミに所属していたながら、卒業論文を思想史で書きたいというわがままが認められたのも、早稲田ならではのことだったと思う。早稲田のほとんどの教師は、学生が主体的に抱いた研究テーマを変更せよなどということは言わない。しかし、自由で干渉がないということとは、一歩間違えば墮落と停滞にもつながる。多様性というのもまたクセモノで、なまじっか多様な人間がいるだけに、狭い世界にこもっていてもそれなりに居場所が出来てしまう。でもそれでは意味が無い。むしろ自分と違う人間と交わり、いろんな価値観に接してこそ、早稲田の持つ特質を活用しえたといえるだろう。いろんな人間がいるからこそ、自分と違う人間と接してほしい。マンモス大学だからこそ、自分とは違う変な人・すごい人が必ずどこかにい

る。そういう学友や教員をどこかで見つけて、徹底的に影響を受けて欲しい。

「何でもあり」の歴史学だからこそ、「何でもあり」の早稲田との親和性も高い。この「何でもあり」の早稲田と歴史学とを相互にリンクさせながら有効に活用して、人間的な奥行きの高さを見につけてほしい。言うは易く行なうは難し。かくいう私も、未だ修業の途上、人間的な奥行きを得ようと模索しつつ、失敗と挫折との連続であるのだが…。

中国史研究の空白領域に挑戦する

飯山 知保

現在の中華人民共和国には五六の法定民族集団が存在するが、これはあくまで最大公約数的な分類であり、実際には四〇〇以上の民族集団が存在するといわれる。この、世界でも有数の多民族国家を統治するため、中国共産党は「中国人」とは何か、それを

どのように定義すべきかという問題を常に追及してきた。この過程で重要な役割を果たしたのが、社会学者・文化人類学者・民俗学者の費孝通（一九一〇—二〇〇五）であった。中華人民共和国の建国後に行われた「民族識別工作」の主要メンバーでもあった費孝通は、その終了後も中国史上にいか

に諸民族を位置づけるかという作業を継続し、「中華民族」という概念の理論化を行った。すなわち、「歴史上、多くの文化・民族が融合して「中華民族」が誕生した」という「多元一体構造」論である。しかし、この論には重大な空白がある。漢民族が主に居住する地域（China proper）の北半（華北）では、その気候条件や多くの戦乱のため、文献史料があまり残存しておらず、南半にくらべてわからないことが多い。とくに一〇〜一五世紀、すなわち、「民族融合」が発生したとされるまさにその時期の状況は、実はほとんどわかっていない。

こうした中、一九九〇年代以降、中国で

上述の時期の華北に関する碑刻（石刻）史料が続々と公刊されている。王朝の正史や著名な文人の文集などの文献史料が、政治・外交・戦争など国家的事柄を記述の主な対象とするのに対し、碑刻史料には地域社会の様々な事柄が記録され、数量も豊富である。さらに、未発表の碑刻が華北には数多く現存する。これら新史料により、女真・モンゴルなどの外来民族に支配された時期の、多民族・多文化が混在する多元的社会の様相が徐々に明らかになり、中国史の空白領域が克服されようとしている。それはまた、現在「中国」の民族・社会構造の成り立ちが再検討されることも意味している。

歴史学に取り組み理由は、個々人により千差万別である。しかし、現代社会が直面する諸問題に対し、歴史学が貢献すべき点は何なのか、その課題への自問は常に行われるべきだろう。一九九〇年代から急激に表出した民族問題は、とくに中国において近年激しさを増しているが、多くの場合、対立の根本には歴史観が関連している。史

料から読み取れる歴史的経緯を客観的に提示することが求められているが、歴史学がその責務に十分に答えられているとはいえないのが現状である。新たな史料と新たな課題を前にして、歴史を学ぶ意味は従来以上に大きくなっている。

歴史のなかの《事実》と《虚構》

蝶野 立彦

一九世紀のヨーロッパで成立した近代的歴史学の研究方法論では、歴史研究者の主観的臆断や脚色によって歴史認識が歪曲される危険を絶えず意識しつつ、そうした臆断・脚色・歪曲を慎重に排して、「史料に即した過去の事実の再構成」をおこなうことが一貫して重視されてきた。即ち、近代的歴史学においては、厳密な史料批判と史料操作によって歴史認識を史料的基盤に基礎づけるとともに、研究史的反省を通じて「研究者自身の視点のイデオロギー的制約」

を常に検討し続けることこそが、「歴史的事実」を様々な「虚構」から峻別するための最も重要な基礎的作業である、と見なされてきたのである。ヨーロッパの近代的歴史学の祖と目されるL・ランケがW・スコットの歴史小説を批判しつつ自らの歴史家としての立場について語った言葉——「私は：虚構から身を背けて、私の著作においてはあらゆる創造や創作を避け、厳密に事実在即しようという考えを固くした」——に端的に示されているように、一九世紀以降の多くの歴史家たちは、歴史を題材にして虚構の物語を創作する「歴史小説家」の仕事と自分たち「歴史家」の仕事との違いを強調することによって、「史料に即した過去の事実の再構成」という歴史学的課題の固有性を主張してきた。そして、ヨーロッパの近代的歴史学が古代・中世・宗教改革期のキリスト教的・救済史的な歴史叙述——即ち、《神の摂理》という宗教的・神話的な物語の枠組みのなかに個々の歴史的出来事を嵌め込んでゆく歴史認識の方法——に